

# 「繁栄」について

松下理念研究部長 佐藤 悌二郎

## 戦前の「繁栄」の意味

PHP用語の意味内容や淵源を探るシリーズ、今回は「Prosperity(繁栄)」について見よう。改めるといってもなく、PHPでいう「繁栄」は《物心ともに豊か》な状態をいうわけですが、松下幸之助は、PHP活動を始める以前から、「繁栄」という言葉を、このような意味で使っていたのでしょうか。

戦前の松下の発言なり言葉を伝える資料は数多くありますが、代表はやはり『私の行き方考え方』でしょう。これは『歩一会誌』に昭和十年四月号から十九年二月号まで六十八回にわたって連載された「自叙伝」が原本になっていますので、それを見れば、松下が「繁栄」という言葉を、戦前どのような意味でどの程度使っていたかということがだいたいわかります。そこで調べてみますと、「繁栄」という言葉が十数箇所出てきました。

「主家も次第に繁栄してきて、店員も四、五名になり……」(昭和十年七月号)、「輪界と電界と両者協定して双方とも繁栄することはでき得ると思ふ」(昭和十四年四月号)、「繁栄日本の実をあげなくてはならない……」(昭和十五年三月号)などです。

特に《命知と創業記念日》に関する記述では、「われらの事業こそ、某教以上に盛大な繁栄をせねばならぬ聖なる事業である」(昭和十八年二月号)、「実業人の使命は貧乏の克服である。社会全体を貧より救って、これを富ましめるにある。商売や生産は、その商店や製作所を繁栄せしめるにあらずして、その働き、活動によって社会を富ましめることにその目的がある」(昭和十八年四月号)といった具合に、「繁栄」という言葉がしばしば登場しますが、これらを見るかぎり、戦前の松下にとって、「繁栄」はあくまで貧乏の克服を意味するものであり、物質的な豊かさ

を表現するための言葉にとどまっていたといえるでしょう。

## 真の富は心の富

とはいえ決して心の面が無視されていたわけではありませぬ。「自叙伝」では《命知》のきっかけとなった昭和七年三月の天理教本部見学後に考えたことが、次のように綴られています。「人間生活は精神的安心と、物資の豊富さによってその幸福が維持され向上が続けられるのである。その一つを欠いてもならない。精神的安定があっても、物資に乏しくは生命の維持すら困難である。物資が豊かでも精神的安心立命がなくては人間の価値もまたしあわせもない。両者は車の両輪のごとき存在である」(昭和十八年二月号)

このように、「繁栄」には含まれませんが、明らかに、精神、心の面についても思いを馳せています。

なお、戦前の発言で、「心の豊かさ」が直接的に語られたものとしては、次の言葉をあげることができるでしょう。

「自分には近ごろ、真の富は心の富であると、切に考えられてきた。もちろん事業の遂行に物質的富が必要であることはいづまでもないが、やはり人として、第一義は心の富をちかうことである。この点自分はまだ貧弱であるから、大いに心の富を積むべく修養に努めている次第である」(社主一日「話」昭和十年四月八日)

## 物心一如の繁栄が真の繁栄

さて、物質的豊かさのみを示す「繁栄」が、今日のような物心両面の豊かさを示す言葉として表現されるようになったのはいつのことなのでしょう。普通考えられるのは、PHP研究所が創設されたときでしょう。

ところが、昭和二十一年十一月三日の開所式の挨拶では、なるほど「繁栄」という言葉は何度か出てきますが、それら使われ方を見ると、どうも従来の物質的な豊かさを意味しているように思われます。開所時の名称がPHP研究所ではなく、「松下電器経営経済研究所」であったことも、そのあたりの事情を物語っているといえます。

では、「繁栄」が物心両面の豊かさを意味すると明確に語られたのはいつか。残された資料を見るかぎりでは、それはPHP

活動趣意書パンフレット『PHP研究とPHP運動』においてです。そのなかで、「ここに繁栄といふのは、単に金持ちになるとか、暮しがゆたかになるとか、といふだけのことはなく、いはば物心一如の繁栄といふことであつて、碎けたいひ方をすれば、『心もゆたか、身もゆたか』といふやうな在り方をいふのである」と書かれています。

この小冊子は、二十一年十二月十四日に印刷が完成したと記録にあり、この原本、叩き台になったと思われる小冊子『経営経済研究所について』(十一月十六日文書完成、同二十五日冊子完成)には、まさきに見たような「繁栄」についての説明は認められません。

以上のような状況から考えますと、『経営経済研究所について』の完成から「PHP研究とPHP運動」ができあがるまで、すなわち十一月末から十二月初旬にかけての数日間、「繁栄」の意味内容が変化したと推測されます。十一月二十八日に経営経済研究所からPHP研究所に改称しているのも、このあたりのことあるいは関係があるのかも知れません。こうした「繁栄」の意味内容の変化は、おそらく研究所設立後に、さまざまな方々との議論や繁栄、平和、幸福に対する思索のなかからもたらされたものと考えられます。しかし、いつ、どのようなことがあつて、そのような変化が起こったのかということについては、残念ながらはっきりとした資料はありません。

ただ、この「繁栄」についての理解の変化があつたからこそ、松下グループにおけるPHP研究所の独自性と、PHPの研究活動に幅と厚みが出てきたといつことができるでしょう。物質的豊かさとしての繁栄を追求するとなれば、それは他の松下グループの経営理念と変わらなくなり、経営や生産技術の研究のみになつて、人間観、教育、宗教等はその対象から外れてしまします。さらには、心の豊かな人が増えれば、それだけ仲良く楽しく暮らせる社会が実現されます。つまり、物心両面の豊かさを意味する「繁栄」であれば、その「繁栄」の実現の程度に応じて、必然的に「平和」「も」「幸福」も実現されているという、何とも妙味のあることになるわけです。

ともあれ、このような「繁栄」についての理解の変化が、いつ、どこで、どのようにもたらされたのか、興味は尽きませぬ。今後さらに調べていく必要があります。